

## 藤尾からお延へ女の狡猾ヴァージョンアップ

Junko Higasa 2013.10.15

20世紀の天才：夏目漱石氏は、女性心理学の権威であった。その小説には純愛から生じる独占的恋情が男を管理するという女の特殊能力が描かれている。

『虞美人草』の藤尾は、自分の魅力で男を操れることに絶大な自信を持っていた。しかしその裏には立派な男にリードしてもらいたいという願望が隠れていた。男が自分の思い通りになれば嬉しいが、反面それは玩具に過ぎず、すぐに飽きる。かといって男が「俺についてこい」的に一方的に前を歩けば、自分の魅力を発揮する場所がない。つまり理想は「まあ、藤尾様、さすがでございますわね。才色兼備の貴女様に相応しい立派なご主人ですこと。到底私たちの及ぶところではありませんわ」と夫がナイト役として人々の目に映り、自分は羨望の的になりたい。しかし藤尾の表立った駆け引きは失敗に終わった。まだ未熟である。男性操縦法を改善する必要がある。

そこで開発されたのが『明暗』である。藤尾はヴァージョンアップされてお延となる。金と美貌でダメなら逆で行きましょ。「自分の思惑を悟られるからいけないんだわ。私はしっかり計算してミスはしないわ」と、外面の自惚れを内面の自惚れにリニューアルしたが、ついでに男も以前よりヴァージョンアップさせたので、お互い水面下の騙し合いとなる。元は純粋な気持ちから発した恋が、計算尽くしになる愛の結末や如何に。『明暗』の未完が惜しまれる。